

ネパールのチベット・ビルマ語系言語— ガレ語の調査について

西 義郎*

1. タマン語群とガレ語——調査の動機

ネパール中央部のヒマラヤ山脈南面一帯に住み、チベット・ビルマ語系の言語を話す人々にタマン族 (Tamang), グルン族 (Gurung), タカリ族 (Thakali), といった民族がいる。彼等の話すタマン語, グルン語, タカリ語といった言語は、互に歴史的に極めて近い関係にあり、チベット・ビルマ語系諸語 (Tibeto-Burman) の中で共通の祖語を設定できる下位語群を形成していることが最初にシナ・チベット語族の比較研究を集成したロバート・シェーファー (Robert Shafer) により以前から主張されていた¹⁾。この語群に属する言語のうち、タマン語を話す人口が圧倒的に多く、しかも、タマン語は、これらの諸言語から再構される共通祖語形に最も近いところから、この語群をタマン語群 (Tamang group) と呼び、その祖語を仮りにタマン祖語 (Proto-Tamang) と呼ぶことにする。

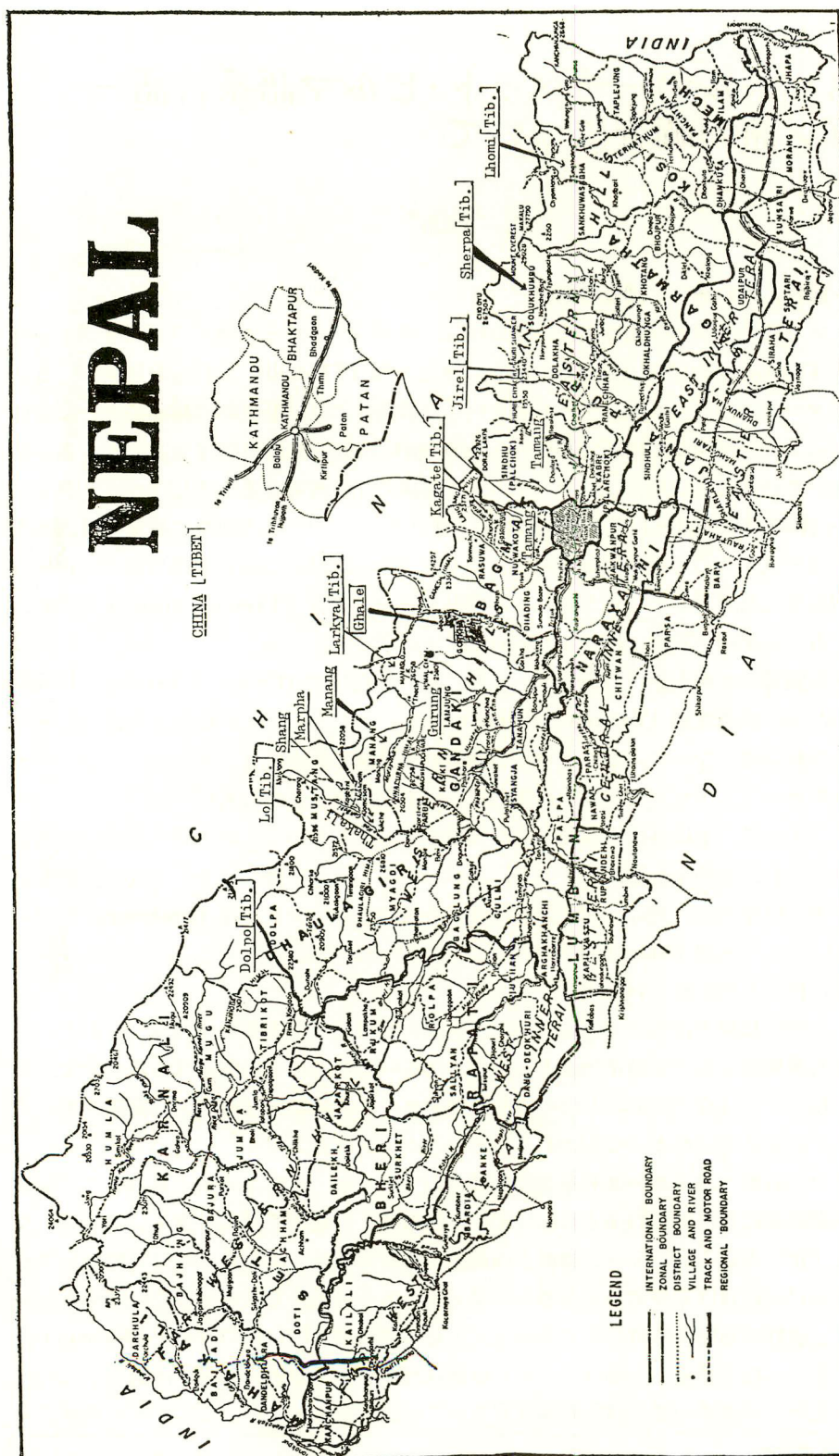
この語群の諸言語が西藏語 (Tibetan) (実際には、西藏祖語 (Proto-Tibetan) と比較すべきところだが、西藏文語 (Written Tibetan) をほゞそれに相当するものと考えて、それと比較するのが慣例となっている) と多くの基礎的な語彙を共有することから、シェーファーは、これをチベット・ビルマ語族の西藏語系の一下位語群として位置付けた。

1960年代に入って、主に外国人言語学者や人類学者によるネパールの言語・民族の調査や研究が進むにつれ、この3言語についても、音韻・文法・語彙に関する多くの資料や研究が発表されるようになった。更に、同じ語群に属する言語としてマナン語 (Manang), シャン語 (Shang), マルファ語 (Marpha) 等が存在することが分ったが、これらの言語についての調査はまだ殆んど行われていない²⁾。

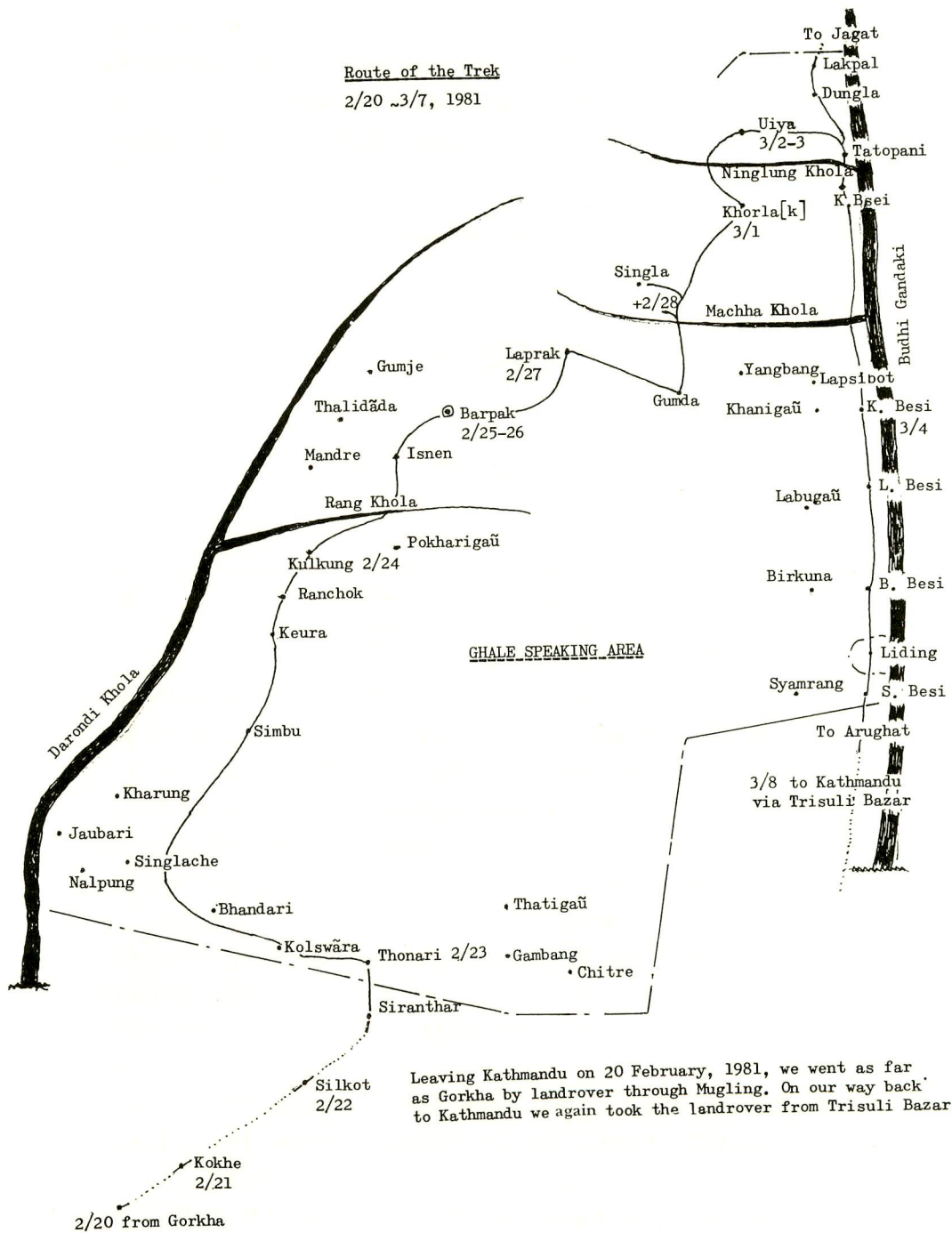
しかし、タマン祖語の再構の大筋は、前記3言語の資料だけでも充分であり、しかも、この3言語の共通祖語からの分裂年代はそれ程古くはない所から様々な問題はあるにせよ、それ程困難でないことは直ぐに明らかになった。問題は、この語群と西藏語との関係が果してシェーファーが考えていたようなものか否かという点にあった。

確かにタマン語群と西藏語の共有基礎語彙は他のチベット・ビルマ語系の言語とこの語群との共有基礎語彙に比して相当多く目に付くが、西藏語との地理的關係や西藏語の背景をなす卓越した文化を考えると、タマン語群と西藏語の共有語彙の一部分あるいは大部分がタマン祖語の段階以前における後者から前者への借用語である可能性も否定できないのである。その上タマン語群の基礎的語彙のうちチベット・ビルマ祖語 (Proto-Tibeto-Burman) に由来すると考えられる語彙の一部は、タマン語群以外のビルマ語系や広義の西藏語系に入れられているヒマラヤ語系の諸言語とのみ共有されている。シェーファーもこの点を考慮に入

* 現愛媛大学法文学部



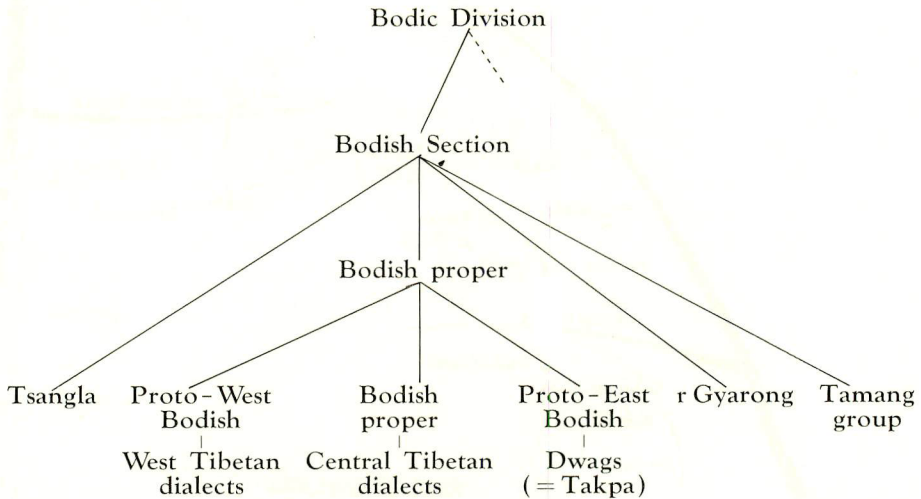
地図(Ⅰ)(原図はBista 1972による。)



地図 (II)

れてか、西藏語とタマン語群を直接結ばずに、両者の関係を次の系統図で示すような関係と考えた³⁾。

(西藏語系に対してシェーファーは、西藏を意味する西藏文語形の **Bod** を語幹として用い、大きい語群から小さい語群へと **Bodic Division-Bodish Section-Bodish Branch** のように名付けている。ここでいうタマン語群 (**Tamang Group**) をシェーファーは、**Gurung Branch** と呼んでいる。なお、以下において、**Bodic** も **Bodish** も西藏語系と呼ぶことにする。)



ここに挙げられている言語・方言中所謂西藏方言は、**Dwags** を除いた **Bodish proper** の諸方言である。**Tsangla** と **Dwags** については、資料が乏しく、両者の正確な位置付けは今後の問題と云えるが、音韻変化や語彙の面で西藏語方言とは異質の要素を含んでいることは確かである。^(補注1) 他方、ギャロン語 (**r Gyarnng**) の西藏語と共有する語彙の多くは、むしろ西藏語からの借用語と考えられる上に残る語彙に非西藏語的な語彙が矢張り認められる。加えて、ギャロン語は、特異な形態論を有する所からこの表のような位置付けは疑問である。

残るタマン語群の場合も、語彙の面は兎も角として、西藏語と異った音韻変化を仮定したり、タマン租語以前の段階で西藏文語形には認められない前接辞を仮定しなければならない場合が相当ある。こういった理由から最近ではニコラス C. バドマン教授 (**Nicholas C. Bodman**) のようにシェーファーの主張する西藏語とこれらの諸言語との関係を否定する者もいるが⁴⁾、私はまだシェーファーの分類に可能性があると考えている。^(補注2) 次にタマン語と西藏語との特異な対応の例をみてみよう。(慣例に従って、西藏語形には文語形を挙げて示すことにする。略語：**WrT**=**Written Tibetan** (西藏文語), **PTam**=**Proto-Tamang** (タマン租語)。C は前接辞を表わす⁵⁾。N は鼻音的前接辞あるいは前鼻音的要素を表わし、文語形の轉写では、子音の前での **ha-chung** や **m-** に相当する。大文字の **P, T, K** は、それぞれ両唇音、歯音、軟口蓋音の破裂音：**(p/ph/b)**, **(t/th/d)**, **(k/kh/g)** を表わす。タマン租語形で用いられた場合には、その位置で無声対有声と無気対有気の対立が中和されていることを示す。)

(I)	WrT	kh-	: PTam	*d-
house		khyim	:	*dim ^B
needle		khap	:	*dap ^B
cf. white		dkar (-po)	:	*tar ^A
star		skar (-ma)	:	*sar ^A
(II)	WrT	l-	: PTam	*gy-
path		lam	:	*gyam ^B
sheep		lug	:	*gyuu ^B (< *gyuk)
work		las (< *lads)	: ?	*gyat ^B
(III)	WrT	(\emptyset)l-	: PTam	* \emptyset y-
hand, arm		lag (-pa)	:	* \emptyset yaa ^A (< * \emptyset yak)
pour-1		blug~ldug	: ?	* \emptyset yu ^A (< * \emptyset yuk) ("pour out")
cf. stone		luŋ (Lushai)	:	* \emptyset yur-Pa ^B
enough		lok (Burmese)	:	* \emptyset yoo ^B (< * \emptyset yok)
pour-2		blug~ldug	:	*luu ^A (< *luk) ("pour into")
(IV)	WrT	\emptyset ž-	: PTam	*(\emptyset)ŋy-
laugh		bžad~gžad	:	* \emptyset ŋyat ^B
melt, dissolve		ŋju (< *ŋzu)	:	*ŋyu ^B
(V)	WrT	sñ- (< *sn-)	: PTam	*t-
heart		sñiŋ (< *sniŋ)	:	*tiŋ ^A
year		-niŋ (< *sniŋ)	:	*-Tiŋ
(VI)	WrT	Kr-	: PTam	*K-
blood		khrag	:	*kaa ^B (< *kak)
cold		graŋ (-mo)	:	*khaŋ ^B
cheek		ŋgram (-pa)	:	*kam ^B ("chin")
cf. cheek		ŋgram-pa	:	*gram-Pa ^B
(VII)	WrT	rk-	: PTam	*Cr- (C = consonant)
waist		rked (-pa)~ sked (-pa)	:	*k(r)et ^A
marrow		rkaŋ	:	*traŋ ^A

(III) の "pour" と (IV) の "cheek" (PTam "chin") に挙げた西藏文語形が正しければ、西藏文語形に対して、それぞれ 2 個の PTam 形が対応することになる。このような場合にタマン租語の各形式は双生語 (doublet) と呼ばれる。

上に挙げた PTam 形をみると、前接辞として * \emptyset - あるいは *ŋ- を仮定してある。一方、西藏文語形では、語頭に dk- 'white', sk- 'star', bl-~ld- (< *dl-) 'pour', bž-~gž- 'laugh',

Nj- (< *Nž-) “melt”, sñ- ‘heart’, Ngr- ‘cheek’ や rk- “waist ; marrow” のような一見子音結合のように思われるものがあるが、これらの子音群の最初の子音 : d-, b-, s-, r-, Ñ- に矢張り同じような位置に現われる g-, l- を加えたものを伝統的に西藏文語の前接辞と呼んでいる。普通、前接辞とは、語幹に加えられる特定の意味機能を持った非自立的要素に与えられる呼称であるが、西藏文語の前接辞に関しては、動詞に付く一部を除いてその意味機能は全く不明であるか、ある程度推測できるに留まる。このような状態は、西藏語が文字化された A. D. 7 C 前後の時点で既に始まっていたであろうと考えられる。しかし現在話されているチベット・ビルマ語系の言語でも、先に挙げたギャロン語やカチン語 (Kachin=Jingpo) や多くのヒマラヤ地域の諸言語で西藏語と平行的にあるいは異って、今でも前接辞やそれと語幹の融合した痕跡などが認められるところから、西藏文語で前接辞と呼ばれる前置子音や、文語では、既に語幹頭子音として扱われている子音の一部も、西藏祖語か、それ以前の段階ではっきりした意味機能を擔っていたであろうと推定されるのである。しかし、チベット・ビルマ諸言語あるいは西藏語方言間でも前接辞の分布や意味機能が常に一貫していたとはいえない。従って、同源形式として挙げてあっても、必ずしも同じ前接辞を取っていたとは限らないのである。このことや、語幹頭子音や語幹母音や語幹末子音の異なる変異形の存在や、後接辞の種類やその有無のいった点が言語により必ずしも一致しないところにチベット・ビルマ諸語の比較研究の難しさがあるといえよう。

西藏語の場合は、文語における前接辞と語幹頭子音間の音韻的な共起制限 (co-occurrence restrictions) による音韻体系上の非均衡性などから前接辞と語幹頭子音が互にどのように音聲的に影響し合ったかがある程度推定される。また、現在の衛藏方言 (拉薩方言を含む) のように音韻的 (弁別的) 声調を持つに至った言語で前接辞の果たした役割は、相当以前から正しく推定されていた。この西藏語発達史における前接辞の様々な作用は、類推的に他のチベット・ビルマ諸語の下位語群の祖語の再構やチベット・ビルマ祖語の再構を行う際に適用されて来た。タマン祖語の場合も、たとえば、上記諸例中 (Ⅲ) と (Ⅵ) の PTam 形に *~~ɕ~~- を仮定するのは、タマン語群における高対低 (=緊対緩) といった 2 声調の発生を西藏語方言における声調の発生様式に平行させて解釈し、原因の一部が PTam 形における前接辞の有無にあると考えた結果なのである。更に、(Ⅶ) のような場合には、西藏語史の中で前接辞と語幹頭子音の入れ換え (metathesis) が行われたと考えられる例が数多くあったと推定されていることによる。しかしながら、この場合に特定の語について入れ換えがあったか否か、もしあった場合にどのような条件の下に起ったかなどの点で今でも学者間に相当な意見の食い違いがある。

前接辞に関するこのような予備知識を踏まえて、(Ⅰ) と (Ⅱ) を考えると、西藏文語形とタマン祖語形の両者を説明する祖語形として (Ⅰ) には、*(d)K-を、(Ⅱ) には、*(g) l- といった *(前接辞+) 語幹頭子音を仮定できるよう。即ち、() で示すように西藏文語形は *前接辞を持たない形式に由来し、タマン祖語形は、*前接辞を有する形式に由来すると考えるのである。同様に、(Ⅰ) に参考例として挙げた “white” や “star” の場合も、それぞれの西藏文語形のような祖語形を考えると、タマン祖語形は、“white” では、*dkar > *tkar > *tar のような変化を、“star” では、*skar > *sar のような変化を考えれば説明できそうである。こう

考えると, “chest” PTam *ku^A : WrT dku (“the side of a person’s body”)や“voice, language” PTam *kat^B : WrT skadのような例には, 共通祖語形 *(d)ku と *(s)Kat を立て, (I) と (II) の諸例とは逆に, 西藏文語形は前接辞を持った形式に, タマン祖語形は前接辞を持たない形式に由来するということになる。勿論この場合, タマン祖語として再構はしてあるが, 実際は既に前接辞を失った段階でタマン語系の諸言語が西藏語方言から借用したという可能性も否定できない。このように, *前接辞を持った形式と *前接辞を持たない形式といった祖語における交替形を立てて説明するのは, 余りに恣意的であると思われるかも知れないが, このように考えないと, (I) と (II) の諸例は, タマン語群に独自の語であるということになる。しかし, 一見して分るように, 全く独自というには, 西藏文語形と頭部(initial)以外の部分が余り良く対応しすぎているのである。“chest”や“voice, language”については, (I) と (II) の祖語形を立てる論據からの当然の帰結であるといえる。

以上のように, 共通祖語における*前接辞の有無による交替形を推定することが可能なら, ここに挙げた諸例をシェーファールの分類を否定する論據とするに充分ではないといえよう。ただこのような共通祖語形の措定は, 余りにも仮定の上仮定を積み重ねたという感は免れない。この場合, このような共通祖語形の措定を積極的あるいは消極的に支持する証據を与えて呉れるような言語があれば大いに助かるのである。

タマン語系言語領域の丁度真中辺りに位置するゴルカ地方 (Gorkha jilla) で話されているガレ語 (Ghale) の資料が少しづつ非公式に発表されるようになったのは1973年以降であるが, 私が始めてこの資料を入手したのは1978年になってからであった。この言語の調査者は, 当時ネパールでトリブワン大学のネパール・アジア研究所 (現在のネパール・アジア研究センター)と提携して, ネパール全土の言語の調査研究を行っていた, 基督教者の団体 *Summer Institute of Linguistics* の一員であったラリー L. シーワード氏 (Larry L. Seaward) であった。不幸にして, この団体が1975年にネパールから撤退したことにより同氏の調査も中断され, その結果, 同氏の資料は, 音韻表記化も終らないまゝにほんの一部が非公式に発表されるに留った。

このガレ語の資料を検討してみたところ, ガレ語がタマン語群と単に基礎語彙を多く共有するだけでなく, 後者を「特徴付ける」ような語彙, 音韻変化や意味変化(?)のいくつかを共有しており, タマン語群と共通祖語を設定できる可能性があることが分った。ここで「特徴付ける」というのは, タマン語群以外に (今の所) 見当らないという意味であり, そのような音韻変化や意味変化や語彙 (更に文法的要素) を共有するということは, とりもなおさずタマン語群とガレ語の共通祖語の段階で「共通の改変」(shared innovation) が起ったことを意味し, 単に基礎的な語彙の共有以上に下位分類の重要は指標となるのである。次にこの例をいくつか挙げてみよう。(シーワード氏の資料は不統一なので, 私の採録したガレ語ケウラ方言形 (Keura) でガレ語形を代表して示す。なお, この方言では, 破裂音と破擦音の系列に無声音対有声音の対立がない。声調は次の4種である: 高平/ˊ/, 中平 (無表記), 中/低昇/ˊˊ/, 中/低降/ˊˊ/ 参考のためビルマ文語形=(WrB) と西藏文語形も挙げておいた)⁶⁾

(A) 語彙

	PTam	Ghale	WrT	WrB
snow	*gli ^B	: lyáŋ	: [kha-]	: [hnáŋ]
egg	*phum ^B	: káphum	: [sgo-ŋa]	: [-ʔu']
black	*ʕmlaŋ ^B	: lǎŋ	: [nag-]	: [máŋ-]
cold, cool	*sim ^A	: sǐm	: [bsil-]	: [khyám-]
walk	*bra ^B	: prá-	: [ŋgro-]	: [hlyok-]

(B) 意味変化 (?)

	PTam	Ghale	WrT	WrB
head	*kra ^A	: ʈǎ < *kra	: [mgo]	: [ʔú-khóŋ]
cf. WrT skra 'hair of the head'.				
gold	*mar ^B	: mǎr	: [gser]	: [hrwe]
cf. WrT dmar- 'red'.				

(C) 音韻変化

	PTam	Ghale	WrT	WrB
(1) heart	*ti ^A	: tyāŋ	: sñiŋ	: hñac (< *snik)
ʔyear	*-Tiŋ	: -yǐŋ	: -niŋ	: -hñac (< *snik)
(2) blood	*kaa ^B < *kak	: kǎ < *kak	: khrag	: [swé]
cold	*khaŋ ^B	: khaŋa	: graŋ	: [ʔé-]
ʔchin	*kam ^B	: ŋam(cya)	: ʔŋgram-	: [mé-]
cf. cheek	*gram-Pa ^B	: ʈámpá	: ʔŋgram-pa	: [pá]

(同源形式でないものは、〔 〕で示す。)

(C) の(1) “year” のガレ語形は、タマン租語や西藏文語形と同様に、複合語の第2音節にしか現われず、しかも音節頭子音を失っているので、ここに入れるべきか否か不明であるが、参考の為に挙げておいた。なお、*sn- > st-/t- のような変化は、印度北西部で活されているチベット・ビルマ語系のカナウリ語 (Kanauri) にもみられる変化である。この言語では、この変化がもって規則的に起っており、たとえば、“nose” sta--ta- : PTam *ʕna^A : WrT sna : WrB hna) “seven” stis (: PTam *ʕnis^B : WrT [bdun] WrB khu'-hñac), “gums” stil~til (: Tamang 'nil : WrT sñil~rñil), “heart” stiŋ (: PTam *ti^A : WrT sñiŋ : WrB hñac) などがある。タマン語群に特異な点は、この変化が “heart” と “year” の2語に限られているという点である。なお、この2語は借用語と考えられなくもないが、“heart” は基礎的な語であり、“year” の *-Tiŋ の方も複合語として慣用語化された語にのみ現われることから、借用語の可能性は考えられないだけでなく、タマン語群の周辺でこの2語が同じような変化を示している言語も見当たらない。(2) の例の、“chin” に挙げたガレ語 ŋam(cya) “jaw” の語頭子音は、西藏文語形の ʔŋgram- “cheek” に対応するとすれば、*ʔg- > ŋ- のような変化が仮定される。なお、ガレ語形の -cya の意味は “to bite” であろう。(Cf. cyǎ “to bite”).

(C) の(2)に挙げた西藏文語形 *khrag* “blood” は, *bdun* “seven” などと共に, 西藏語方言可否かを識別するための指標的な語であると考えられる。従って, PTam **kaa* > **kak* や Ghale *kǎ* < **kak* が *khrag* に確実に対応するとすれば, 西藏語とこれらの言語の関係も一層確実になるといえる。なお, 漢語の「赤」“red” の漢語祖語形は, 李方桂教授により **khrijak* のように再構され, これが WrT *khrag* に対応すると考えられているが, もしそうだとすると, *khrag* そのものは, 西藏語に独自のものとはいえないが, “blood” の意味である点では矢張り独自の形式といえよう。この場合, 漢語の “red” が原義だとすれば, WrT *dmār-po* “red” は, 原義とはいいい難くなり, “red” > PTam / Ghale “gold” と単純に決定できない。意味に関する場合は, このように「改変」(innovation) 可否かを決定することは屢々困難である。

以上のようにタマン語群とガレ語は語彙や音韻変化や意味変化(?)を共有しているが, タマン語群にはガレ語が共有しない多くの語彙が認められる外に, ガレ語は, タマン語群と異なり, 本来の *有聲破裂音が *l-*, *r-* の前で脱落している。これは, ガレ語独自の変化といえる。同時に, 数詞の例 (e. g. “one” Ghale *tyǎ* < **tyak*? < **tik*, PTAM **grik*^B, cf. WrT *gcig*; “four” Ghale *sì*, PTam **bli*^B, cf. WrT *bži*) をみただけでも分るように, ガレ語は, タマン語群の言語ではなく, タマン語群と西藏語の中間に位置する言語ではなかろうかと推定される。こういった推定を基にして, (I) と (II) に挙げたタマン祖語形とガレ語ケウラ方言形を比較してみよう。

(I')	PTam	Ghale	WrT	WrB
house	* <i>dim</i> ^B	: <i>kǐm</i>	: <i>khyim</i>	: ? <i>im</i>
needle	* <i>dap</i> ^B	: <i>kap</i>	: <i>khap</i>	: ? <i>ap</i>
cf. white	* <i>tar</i> ^A	: <i>kǎr</i>	: <i>dkar-</i>	: [<i>phru</i> < <i>phlū</i>]
star	* <i>sar</i> ^A	: <i>karcén</i>	: <i>skar-</i>	: ? <i>kray</i>
(II')				
path	* <i>gyam</i> ^B	: <i>lóm</i>	: <i>lam</i>	: <i>lam</i>
sheep	* <i>gyuu</i> ^B < * <i>gyuk</i>	: [<i>sǒn</i>]	: <i>lug</i>	: [<i>súi</i>]
work	* <i>gyat</i> ^B	: [<i>Nepali</i>]	: <i>las</i>	: [<i>ʔə-lup</i>]

更に, (III) では, タマン語群に **ɕl-* > **ɕy-* のような変化が推定できるが, ガレ語の *l-* が対応している。

	PTam	Ghale	WrT	WrB
(III') hand	* <i>ɕyaa</i> ^A < * <i>ɕlak</i>	: <i>lǎ</i> < * <i>lak</i>	: <i>lag-</i>	: <i>lak</i>
stone	* <i>ɕyuj</i> ^B	: <i>lój</i>	: [<i>rdo</i>]	: <i>kyok</i> < <i>klok</i>

(Keura 方言には, “pour” と “enough” の同源形式が欠けている。)

タマン語群, ガレ語, 西藏語との間に上述のような系譜関係が成り立ち, 前2者の間に祖

語を措定することが可能なら、そこでは、(I) *dK- を、(II) *gl- を措定できよう。このことはガレ語が k- と l- を保存していることから一層確実な推定となる。同様に、“white”と“star”にもそれぞれ *dK- と *sk- が推定できよう。

問題はここで終らない。たとえば、(I') の“house”と“needle”のタマン祖語形の*有聲語頭音と“white”のその*無聲語頭音の対比から、この3語の前タマン祖語形(Pre-Tamang)は、それぞれ *dgim, *dgap, *dkar を仮定できるが、そうすると、Pre-Tamng *-g- : WrT kh- といった対応を考えなくてはならなくなる。タマン語祖と西藏文語の語頭音の対応は、それ程単純明快でない。PTam *有聲音 : WrT 無聲有気音 (例 “nest” PTam *dzap^A : WrT tshap, “joint” PTam *dzii^A > *dzik : WrT tshig, etc.) に対して逆の対応 : PTam *無聲有気音 : WrT 有聲音 (例 “braid, twist” PTam *khrim^A : WrT -grim, “cold” PTam *kha^B : WrT gra^B) も立てられる。タマン祖語と西藏祖語の共通祖語の音韻体系には、勿論このような対応全体を説明できるようなものを措定しなければならない。ガレ語 (多分いくつかの方言が含まれる。) がその際にどの程度貢献し得るか否か未知数であるが、多少なりともその可能性はあるといえよう。更に、タマン語諸、ガレ語以外の言語で矢張り西藏語と近い関係にある言語が存在する可能性もある。そういった言語や西藏語諸方言の調査も、文語や文語成立以前の西藏語の研究と平行して行う必要があると考えている。

以上に述べたようなガレ語の系譜関係の可能性やタマン諸語と西藏語の共通祖語を再構する際のつなぎの役割を果し得る可能性について、シーワード氏の可成り不統一なガレ語資料を検討しているうちに思い当り、そのことが今回のネパール言語調査 (1980年9月~1981年3月) の際にガレ語の予備調査を行うに至った主な理由であった。

1. Shafer, R. 1950. “Classification of Some Languages of the Himalayas,” *Journal of the Bihar Research Society* 34, 194-214.
 2. これらの言語については、Mazaudon 1973と1978に60語から70語前後の単語が記録されている。なお、マナン語は、本文に記したような事情で調査が中断され、ボカラで調査する予定であったマルファ語も諸般の事情でボカラへ行けなくなり、これも調査できなくなった。幸いにも、シャン語は、私達の隊員の一人長野泰彦氏 (国立民族博物館) がKagbeni (カリ・ガンダキ上流の村) で1,000語前後の語彙を採録した。
 3. Shafer 1966, p. 113.
 4. Bodman 1980, p. 39, fn. 7.
 5. *C- は、一つの前接辞とは限らない。西藏文語形との対応からみて、*s- を一部の語の場合に仮定できなくもないが、まだ全体的に前接辞を再構するのは不可能である所から、*C- で全てを代表させておく。
 6. 一応音韻化してあるが、声調 (とくに2音節以上の語について) は更に検討を要する。なお、Keura 方言 (dialect というより patois 位の意味) 以外のガレ語の方言形は、*Monumenta Serindica* No. 10 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所刊) に載せた私の小論文, “Five Swadesh 100-Word Lists for the Ghale Language” を参照されたい。
Keura 方言には、22ケの子音音素と6ケの母音音素が立てられる。
1. 子音音素 /p ph t th c ch t̪ th k kh; s h; m n ŋ; l r hr w hw y hy/. 今の所 /hl/ は見当たらない。
 2. 母音音素 /i e a α o u/.
声調は、上記の4ケである。
子音結合は、Cy-, Cr-, Cl-, Cw-, Cry-, Cly-, Cyw- の7種類がある。

7. 今の所、ガレ語とタマン諸語の声調はうまく対応しない。この点は、大いに問題になる所であるが、ここでは考慮していない。
8. YAK No. 5 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所刊)に掲載。

2. ガレ語地域の踏査

1980年の暮もおしつまった頃、カトマンズの宿で行っていたマナン語の調査がインフォーマントの青年の都合で中止同然の状態になり、彼に代わるインフォーマントを探すことは非常に難しい状況にあった。しかも、いろいろな事情から当初予定していたポカラでのマルファ語の調査も断念せざるを得なくなり、新しく調査言語を探さざるを得なくなった。ガレ語の調査は勿論最初から考えていたのだが、カトマンズやトリブワン大学の知人や友人に尋ねても、ガレ語の存在そのものを知る者がなく、ましてやカトマンズでガレ語のインフォーマントを探すことなど思いもよらないと考え、帰国前のゴルカ地方踏査の際に直接多少の語彙を採録するに留めざるを得ないとあきらめていたのであったが、こうなっては是が非でもガレ語のインフォーマントを見付け出して、ガレ語調査を行わなくてはならなくなった。そこで、同年の10月12日から10月31日にかけてのマナンへの踏査旅行の際に紹介状を書いて頂いたり、踏査ルートその他について詳細に御教示頂いた H. グルン博士に今一度御願いしてみることにした。グルン博士は名前の通りに、ラムジュン (Lamjung) 地方のグルン族の出身であり、グルン族やマナン族の間に住むガレ族については熟知しておられたが、ガレ語についても殆んど何も御存知なかった。それでも早速探してみると約束された。数日後、グルン博士に呼ばれて、そのオフィスを尋ねると博士の知人で、ゴルカ地方出身のゴルカ連隊の退役将校に紹介して下さり、その人物が適当なインフォーマントを探して連れて来て呉れるということになった。更に数日経って、約束通りその退役将校がビスマン・グルン氏 (Bisman Gurung) をインフォーマントとして連れて来て呉れた。ビスマン氏は、印度でゴルカ兵として兵役に服した経験があり、現在はアメリカ大使館の守衛をしているとのことであった。ガレ語の外にヒンディー語とネパール語を話す英語は全く話せないという。しかもカトマンズに相当長く住みついており、私が希望したようにガレ語の中心地であるといわれるバルパック村 (Barpak) の出身でなく、それより南のケウラ村 (Keura) の出身だという。決して理想的なインフォーマントといえないが、この際選択の余地もないのでビスマン氏をインフォーマントとして使うことにした。以後翌年の2月20日にゴルカ地方の踏査旅行に出発するまで彼の勤めの合間に私の宿泊している所に来て貰い、基礎語彙調査を行った。当時カトマンズは停電続きで、折角来て貰っても何もできない日が多かったが、それより困ったのは私の方は当初から英語を媒介語として調査するつもりが、ビスマン氏は全く英語を理解しないので、ネパール語で話すしかなかったことである。私の方のネパール語は、出発前に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所でのネパール語講習会で同研究所員で文化人類学者の石井博助教授の授業の最初の部分を聴講させて貰っただけのもので簡単な日常会話にも充分といえない代物だったため、意志の疎通に大変苦労した。その所為で調査の方も仲々進まず、もしネパール語が堪能であったなら記録できたであろう多くの情報も聞き洩してしまった。改めていうまでもないが、ネパールの言語調査には、ネパール語が絶対に必要だと痛

感させられた。もっとも中国との国境地帯の西藏文化の影響の強かった地方では、西藏語方言以外の言語でも西藏語による調査が今でも可能であり、特にインフォーマントが中年以上の場合には、ネパール語の方が不得手の者も多いようである。

そういった状況であったが、調査の方は少しずつ進み始めた。その間2月下旬に定めたゴルカ地方のガレ語領域調査のためにその地域の情報を収集すべく努めたが、結局の所、ビスマン氏以外に適当な情報を伝えて呉れる者はいなかった。ビスマン氏は知っているだけの情報、特にガレ語が活されている村の名を教えて呉れ、大雑把なものであるが大体の地理的位置を画いてくれた。結局これが実際の踏査での唯一の頼りとなった。ビスマン氏の話（100%理解したわけではない）から分ったことは、ガレ語を話す村々はダロンディ川（Darondi Khola）とブリ・ガンダキ（Budhi Ghandaki）の間に位置するであろうということとガレ語を話す村は、Thotnari（ネパール語では、Thonari）から始めて Barpak, Laprak, Gumda と続き、多分 Uiya に終るということであった。勿論、ビスマン氏も全部の村名を知っているわけではなく、特に Gumda から先の村については余り知らなかったが、兎に角大凡の見当がついただけでも助かった。次の問題は、その地域を踏査するに要する日数とそこに至る経路であった。この地域は、通常のトレッキングルートから全く外れているので我々の足で一体どの位日数がかかるのか予測の立てようがなかった。ビスマン氏のような山地民が歩いた場合と我々の場合とでは、比較のしようがないのである。彼等の1日の行程が我々の足では、2日から3日かゝると考えなくてはならない。それにビスマン氏も全行程を歩いたことはなく、はっきりした答は得られなかった。いずれにせよ、私がネパールを離れる予定日は3月13日であり、その日に遅れることはまかりならぬと厳命されていたので2月下旬に踏査に出発するとして、3月10日前後にはカトマンズに帰って来る必要があった。そのため、一応20日以内と予定を立て、もし遅れそうな場合は、途中で引き返すことにした。幸いにして実際には、17日間でカトマンズに帰えたので別に問題はなかった。次にどのような経路で行くかについて検討したが、先ずガレ語地域に入るには、現地の人は通常 Trisuli Bazar を経て行くとのことであった。後で分ったことだが、我々の取った丁度逆の経路を取れば同じことだったのだが、この時のビスマン氏の話から判断した限りでは、この経路を取ると、部分的にコースを重複しなければガレ語地域を一周することができないような印象を持ったので、グルン博士から聞いた今一つの経路であるゴルカ地方の中心地ゴルカ（Gorkha）を通り北東へ進み、Thonari から Barpak を経て Uiya に至り、最後に Jagat（その昔、中尾先生が川喜田調査隊と共に、マナンからマナスル・ヒマール（Manaslu Himal）の裏側を通り、ブリ・ガンダキ沿ひに下って来られた際に通過した村であるが、出発前に偶々先生からその村のことを伺った）にまで足を延ばし、ブリ・ガンダキ沿ひに下り、Trisuli Bazar を経てカトマンズに帰えることにした。実際には、Uiya に着いた時点で Jagat にはガレ語を話す家族が数家族住んでいるだけで、主な人口は、西藏人であると知り、そこまでの往復に2日の日数を要することを考えて、Uiya から真直にカトマンズへ引き返えた。

こうして、踏査の経路や日程の大凡が決まったので、旅行に必要な人員や装備などについて、前回の踏査の折にも世話をして頂いた Shangri La Tours の大河原氏に準備をお願いした。

一方、グルン博士にお願いして通訳兼助手としてマガル族の青年で、博士が大臣時代に個人秘書を勤めたタバ君 (**H. B. Thapa**) を紹介して頂いた。タバ君は大変有能な青年で踏査旅行の準備段階から踏査を終えるまでの間ずっと助けて貰うことになる。

また、調査に当って、その村の村長や長老に便宜を計って貰えるようするためトリブワン大学のネパール・アジア研究センター長で、著名な人類学者のビスタ教授 (**Dor Bahadur Bista**) に紹介状を書いて頂くことにしたが、生憎ビスタ教授は出張中で不在であった。幸いにも、同センターのメンバーであり、音声学者のヤーダフ博士 (**Ramawatar Yadav**) の盡力で大学からの丁寧な紹介状を頂くことができた。この紹介状は実際大いに役立った。

最後に、この踏査行での調査の目的を次のように定めた。

1. ガレ語地域の画定と全村名を明らかにする。
2. 主だった村々 (4ヶ村から5ヶ村) で100語 (スワデッシュの基礎100語表による) から430語程度の語彙の採録を行う。

前回のマナン旅行の経験から体力的限界を知っていたので、余り大きな目標は立てないことにした。

2月中旬中に中尾佐助先生がカトマンズを来訪される由、かねてから石沢良昭氏より伝言があり、更に中尾先生からもニューデリーからお葉書を頂き、2月18日までカトマンズに滞在されるとのことだったので、ゴルカ地方出発の日を2月19日か20日と最終的に決定した。(実際には20日に出発した)。

この間、私の案内役のサードーとして大河原氏がタマン族のカルマ・チェリン君を選んで呉れた。チェリン君は、以前日本・イラン合同マナスル登山隊にコックとして同行したことがあり、ブリ・ガンダキ沿ひの地理に詳しいというのが選ばれた理由のようである。どちらかといえば、大変口数が多く不平屋ではあるが、一応有能なサードーであった。彼の外にコック、キチンボーイと2名のポーターがカトマンズから同行することになるが、この外にゴルカで雇った3名のポーターと助手のタバ君を含めて、合計9名がこの踏査行の私のパーティとなり、終始行動を共にした。このうち現地で雇ったポーターのうちの1名だけがグルン族で、残りは全員タマン族である。私が単語だけではあるが、タマン語も少し知っていることやこの頃になるとネパール語を片言ながら話すようになっていたので、結構楽しい調査旅行となった。

中尾先生が2月18日にカルカッタへ向けて立たれるのを空港でお見送りをして、翌々日の2月20日の朝8時10分前に **Shangri La Tours** から差し向けられたランドローバーでゴルカに向けて出発した。丁度中国の援助によりまだ砂利を敷きつめただけの道路ではあったが、一応自動車が2台並んで通れる位の中の道路がゴルカまで完成しており、ネパール人の道路工事の監督官が日本・ネパール友好のためといって、即座に許可して呉れたので、警察官を1名同乗させ、ゴルカまでランドローバーで行くことができた。お蔭で1日日程を短縮できた。ゴルカから先も思ったより順調で大体予定通りのルートを踏破して、丁度17日目の午後にはカトマンズに帰着した。旅行の詳細は別の機会に譲ることにして、⁸⁾この踏査行で確認したガレ語領域と我々の旅程については地図(II)に示しておいた。地図(I)には、ネパール内でのこの地域と先に述べたタマン諸語や週辺の西藏語方言の分布を示してある。(地図(I)の

原因は、Biata (1972) による。)

以上簡単にガレ語とガレ族、更に今回の踏査行について主に出発するまでの準備について記したが、今後この地域この調査あるいはネパールの他の地域の調査に赴く人に少しでも参考になれば幸いである。

後 記

今回のガレ語領域踏査旅行は、昭和55年度の文部省科学研究費による東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長北村甫教授を代表者とする海外学術調査隊に加わり、昭和55年9月16日から昭和56年3月13日の約半年間ネパール滞在中に行ったものである。

参 考 文 献

西藏語関係については特に挙げない。タマン諸語とガレ語の文献についてはタマン祖語の再構と関連のあるものだけ挙げておく。その他について詳しくは Nishi (1980) を参照されたい。

1. Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan: a Conspectus*. Cambridge (U. K.): Cambridge University Press.
2. _____, 1973, "Tibeto-Burman Tones with a Note on Teleo-Reconstruction," *Acta Orientalia* (Copenhagen) 35, 127-178.
3. Bista, Dor Bahadur, 1972². *People of Nepal*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
4. Bodman, Nicholas C. 1980. "Proto-Chinese and Sino-Tibetan: Data Towards Establishing the Nature of the Relationship," in Frans Van Coestem and Linda R. Waugh, ed. *Contributions to Historical Linguistics-Issues and Materials*. Leiden: E. J. Brill, pp. 34-199.
5. Mazaudon, Martine. 1973. "Comparison of Six Himalayan Dialects of Tibeto-Burman," *Pakha Sanjam* 6, 78-91.
6. _____, 1978. "Consonantal Mutation and Tonal Split in the Tamang Sub-Family of Tibeto-Burman," *Kailash* 6: 3, 157-179.
7. Messerschmidt, Donald A. 1976. *The Gurungs of Nepal*. New Delhi: the Oxford and IBH Publishing Co.
8. Nishi Yoshio. 1972. Remarks on Reconstructions of some Proto-Tamang Rimes. (第18回日本西藏学会発表論文)
9. Nishi Yoshio, 1979. A. Bibliography of Tibeto-Burman Languages of Nepal (1)-Tamang, Gurung, Thakali, Manang, Ghale, Kaiké. *Monumenta Serindica* No. 6, pp. 85-104. (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所刊)
10. Shafer, Robert. 1966 (Part 1) and 1967 (Part 2). *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

(補注1)

その語、Tsangla 語と Dwags 語について調べていたが、Michael Aris の *Bhutan-the Early History of a Himalayan Kingdom* (Ghazibad (India): Vikas Publishing House Pvt Ltd., 1980) における所説を参考に、最近中国で出版された門巴語の資料(孫宏開等著、1980、『門巴、珞巴、僂人的語言』中国出版社)や私がカトマンズで録音した Tsangla 語の資料を比較検討した結果、次のようなことが明らかになった。まず、ブータンでは、シャーチョップ語(Sharchop = Shar-phyogs-pa「東方人」と呼ばれている言語が Tsangla 語であるが、この言語は、ブータンの東隣の地域——ブラマプトラ河の湾曲部からブータンにかけた地域——の中央モンパ語(Central Monpa)と同じ言語であり、更に中国側の資料にある同河の湾曲部沿いの西藏自治区墨脱県の墨脱門巴語とも同一言語である。また、私の録音した Tsangla 語資料と墨脱門巴語は、その地理的隔りに比して、驚くほど似ている。

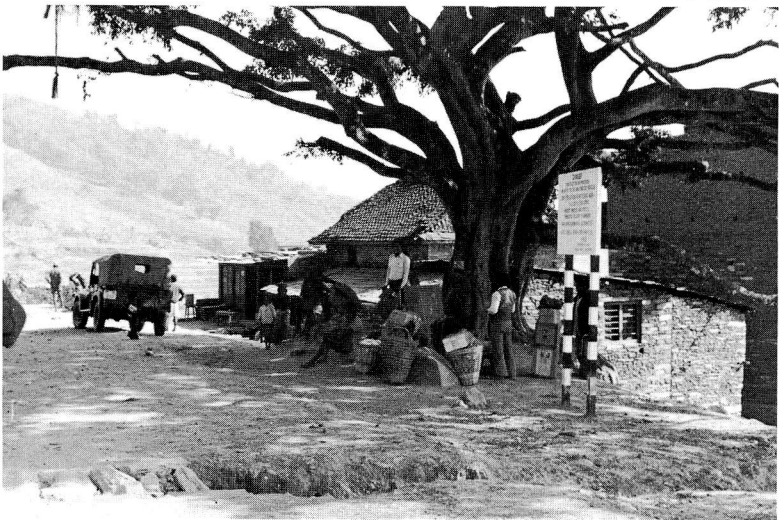
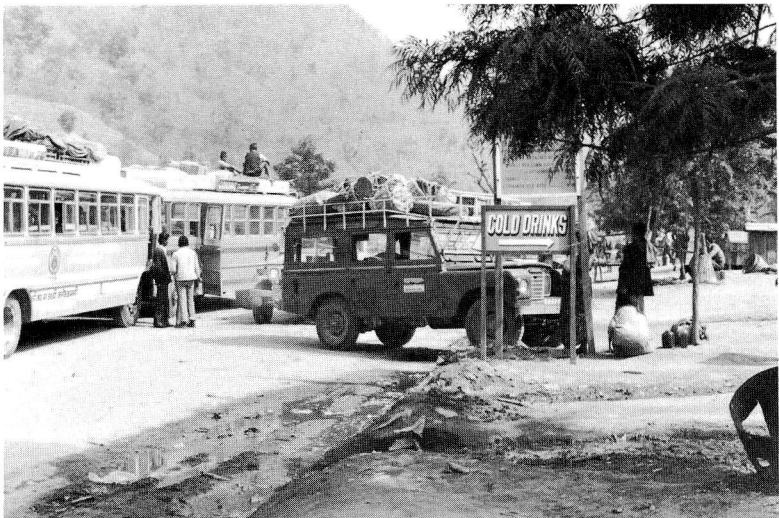
一方、シェーファーが Dwags 語と名付けた言語は、B. H. Hodgson が Takpa あるいは Dakpo と呼んでいる言語をシェーファーが誤つ西藏の Dwags-po と結びつけ、しかも西藏語系に入れて了ったもので、この言語は矢張りブータンの国境の東側の rTawang (中国の地図では這旺となっている) 周辺で話されている北モンパ語(Northern Monpa)の一方言と考えられる。この北モンパ語は、先に挙げた中国側資料では錯那門巴語となっている。Aris によれば、ブータン中央部で話されている Kheng 語と呼ばれる諸言語もこの北モンパ語だというのが、学習院大学の諏訪哲郎氏が採録された Kheng 語の一つである Bumthang 語の語彙を錯那門巴語と比較した所では、まだ同一言語といえるか否か不明である。ざっと概観しただけで、Tsangla 語も Takpa 語も西藏語系に入れるには問題がある点は明らかである。なお、錯那門巴語がタマン語群といくつかの特異語彙を共有している点は注目に値しよう。なお、錯那門巴語(=北モンパ語)と墨脱門巴語(=中央モンパ語)は、いずれもモンパ語と呼ばれるが、同一言語と考えるには余りに異っており、更に比較検討を要する。

(補注2)

この論文を書いた時点でもこの「可能性」についてそれ程確信があった訳ではない。この点に関する私の疑念は古く、既に「鹿児島大学教養部史学科報告」(No. 26 (1977), pp. 53~68) に載せた小論に多少触れたことがあるが、系譜関係についての証明は極めて困難であり、両方の可能性を考えてみる必要がある。しかし、最近、Bodman 教授の考えに可成り近付いている。この点については、現在執筆中の論文あるいは次の論文で更に考究するつもりである。

写真解説

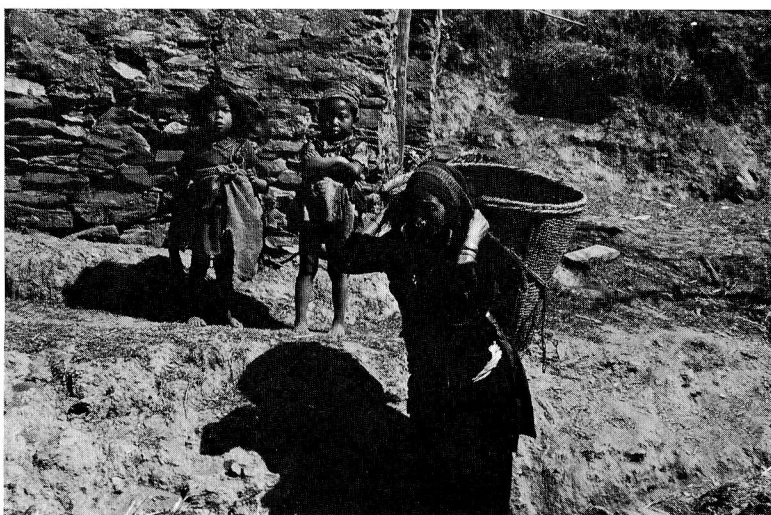
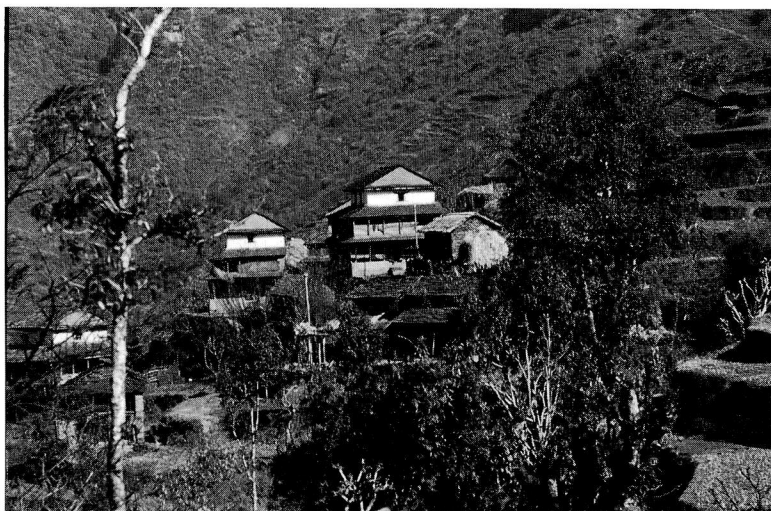
1. Kathmandu-Pokhara-Bhairahawa を結ぶネパールで最も重要な幹線道路 (Prithvi Rajmarga) 沿ひの町 Mugling. 屋根に荷物を載せた青色のランドロバーが、我々がカトマンズから乗って来た車である。ゴルカへ行くにはこの先で右へ折れる。そこから少し行った所に建設中の道路の基点カイレニ (Khaireni) がある。
2. ギルカの町から建設中の道路を望む。この地方の多くの農民達がこの工事で庸われており、ギルカでポーターを探すのに大変手間取った。予定より少ない3人のポーターを見付けるまでまる一日待たされた。
3. 現時点での道路の終点、この道路は将来ガレ語地域の中心である Barpak 村まで延長されるというが、10年位先のことになろう。ギルカの町は、向って左手の丘の中腹にある。木の下にいるのは、カトマンズから同行した連中である。ネパール帽を被っているのがサーダーのチェリン君。



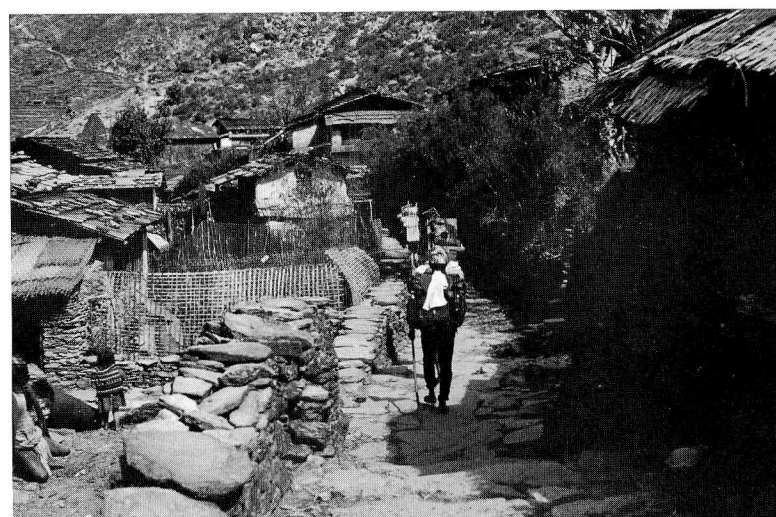
4. ゴルカを中心街。ネパールの人は写真を撮って貰うのが大好きなようである。写真機を構えとこのように人が集って来て、適当にポーズして呉れるので助かる。
5. Kokhe 村でキャンプした際に集って来た子供達。この村の住民は、ネワル族 (Newar) と回教徒のチュレタ (Chureta) と呼ばれる人々だという。ゴルカでキャンプした際には、大変図々しい、ませた餓鬼共が我々のテントの中にまで入って来て物をねだり悩まされたが、Kokhe から先の山村では、子供も大人も大変遠慮深く、ただこのように遠巻きにして眺めているだけであった。
- 5a. Kokhe 村で見掛けた畑の風景。御覧の通りの堆肥を使った自然農法。昭和1桁代の私には懐しい風景。



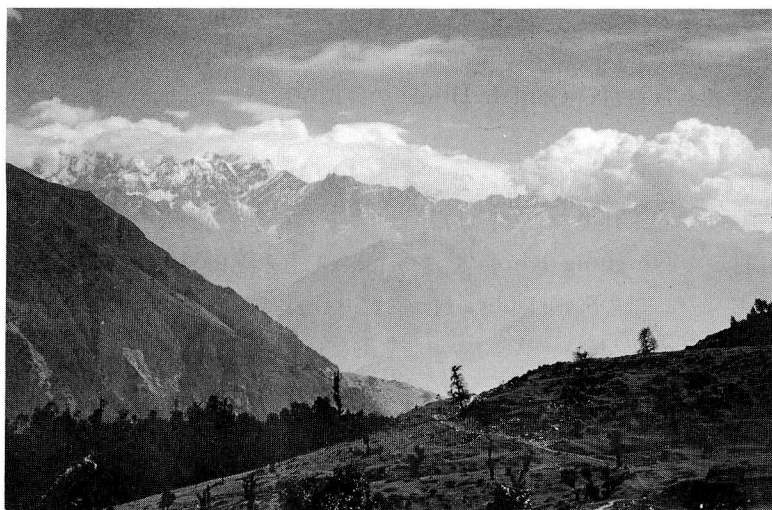
6. **Thonari** 村。向って右側の赤白に塗り分けた3階建の家が村長の家。その左手の3階建の家はその息子の家。なお、この村長夫人と私のインフォーマントのビスマン氏の母親は姉妹であった由。
7. **Keura** 村。ビスマン氏の出身地。一般的にみて、**Barpak** から北の村々の方が高地にあるにも拘らず裕福にみえる。この村は殊の外寂れていて、ビスマン氏がカトマンズに出ていった理由が良く分る。
8. **Keura** 村のビスマン氏の旧居の傍で見掛けた子供達と老婆。この女の子の様に小さい子が赤子を背負って遊んでいる光景は、ネパールで屢々見掛ける光景である。ただこの子供達の年齢は、日本の子供と比較して見掛けだけでは判断ができない。栄養不良の所為で身長も体重も大変劣っている。なお、ビスマン氏の家には彼の継母が一人で住んでいた。



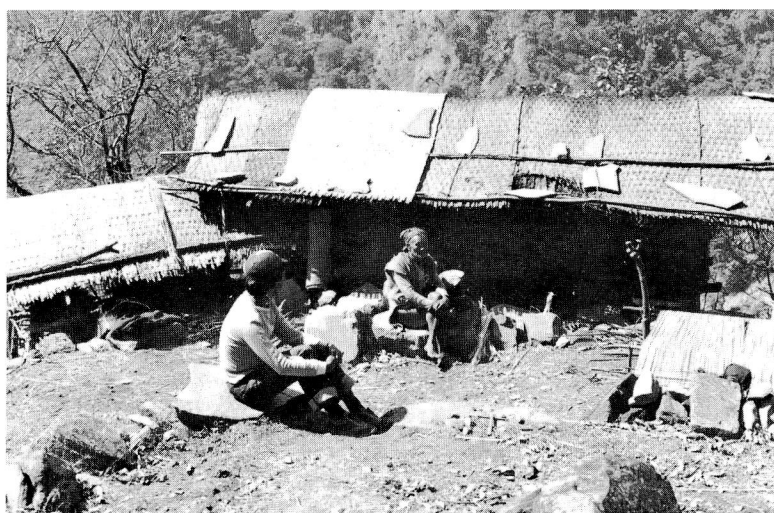
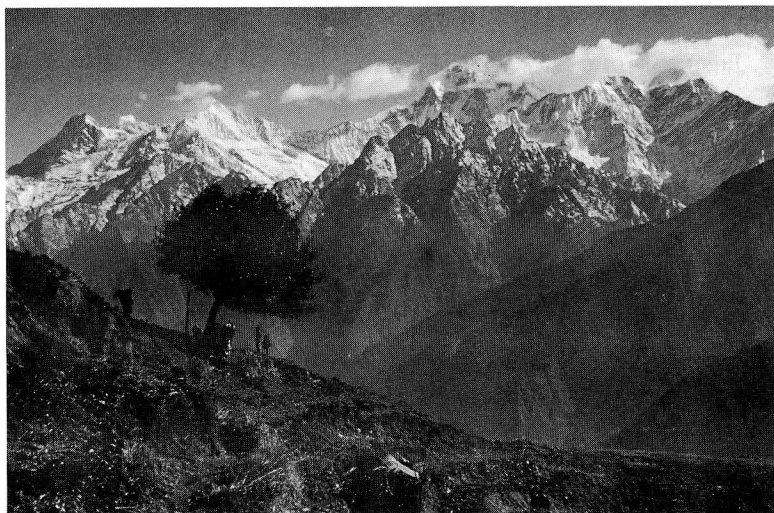
9. **Barpak 村と Manaslu Himal.** 左手の白い花が咲いている木は何の木であろうか。**Barpak** 村はガレ語地域を中心地であり、住民の3分の2程がガレ族で残りはグルン族だという。村は3つの部落に分れている。戸数も全部で650に程の由。この地域では一般にガレ族とグルン族の通婚はないとのことである。勿論最近は例外も多くなっているようである。高度は2000m位であろうか、山の中腹の北側の比較的なだらかな斜面にあるこの村の気候は、冬には相当厳しいであろうと想像できる。ここから次の**Laprak** 村に行くには、高度3000m程の峠を越すわけだが、そこでは3月になっても、まだ所々に雪が残っていた。しかし、この村の北側と西側を取り巻くようにして流れるダロンディ川に囲まれたなだらかな段斜地は相当に広く、地味も比較的豊かなようだ。なによりも大切なことは、湧き水が大変豊富で、村の中心部に2ヶ所の大きな水汲み場があるので、急斜面を登り降りして水を運ぶ必要がないことであろう。正面の山々は、**Manaslu Himal** 南端の山々であり、この写真では雲に陰れて見えないが、最も高い峰は5395mある。**Baudha** (6672m) はここからは見えない。
10. **Barpak** 村の学校の朝礼、ネパールは、学校教育には比較的熱心な国である。乏しい財政状態であるが、どんな僻地の村にも学校がある。この学校は生徒数400名程で教員も8名いる由。女子生徒はそのうち僅か20名程だという。朝礼は10時に始まり、簡単な体操の後で、忠誠の言葉を暗唱する。授業時間数は僅かなようで、我々が昼食を終えた頃にはもう帰って行く子供達がいた。もっとも、1時間以上かけて遠くから通って来る子供も多いことだろう。山の中なので日の暮れるのも早い。校庭の真中にネットが張ってあるが、これで放課後に先生や高学年の生徒達がバレーボールに興じていた。400名の生徒数が登録されているとはいいが、出席率は余り良くないようだ。その原因は、この村の壮丁の95%がグルカ兵として英国軍、印度軍あるいはネパール軍に入っているからだという。軍隊に入れば、どうせ読み書き算術は習うので、村でそんなに熱心に勉強することもないのである。兵役に服する壮丁の率は、この地域の中でも特に高い。彼等は通常年金を貰えるようになると帰村して、家を建て、農業と年金で暮すようだ。その所為か、この村は他村よりも格段と豊かなようである。スレート葺きの家も多い。子供達の服装も比較的奇麗である。中には立派な洋服を着て、新しい子供用の短靴を履いた子供もいた。多分最近外国から帰って来た家族の子供であろう。
11. **Barpak** 村の中心部行く一行。一番最後を歩いているのがチェリン君。村の主な通りはこのように石畳になっている。



12. Barpak 村から Laprak 村へ行く途中の風景。遠くに見えるのは Ganesh Himal の山々である。
13. Laprak 村。この村の直ぐ下を Maccha Khola が流れている。この村は、ガレ語地域で 2 番目に大きい村で、戸数も 450 戸程ある由。しかし、地の利が悪く、平地がなく、斜面にこれだけの家がつまっているので、なんとなくごみごみしている。住民はグルン族である。
14. Laprak 村から Gumda 村へ向う途中の丸木橋。向って左側からカトマンズから連れて来たポーター、キッチンボーイとゴルカで庸ったグルン族のポーター。3 人とも大変頑健な若者である。右端のポーターの背負っているのはベニヤ製のテーブル、その後に大テントが括りつけてある。真中のキッチンボーイが背負っている箱に我々の食糧である缶詰類、果物類、ビスケット、調味料などが入っている。



15. Singla 村の下から眺めた **Ganesh Himal** の山々。Gumda から急坂を下り、Maccha Khola の傍の段丘にキャンプして、翌朝再び急坂を 2 時間登りつめると突然目の前に万年雪と氷に覆われた白い **Ganesh Himal** の連山が現われる。ネパールにいることを実感する一瞬である。
16. Singla 村。上から歩いて来るのは少し気が触れたオッサン、大変ブロークンなネパール語でいろいろ尋ねられて参った。
17. Kholak 村から **Ninglung Khola** を渡り、急坂を登ると山の中腹に一軒屋があり、老夫婦が住んでいた。この夫婦は **Uiya** 村から移り住んだという。老人と話しているのは助手のタバ君。桃の花が咲いていたのが印象的だった。



18. 終点 **Uiya** 村。これから先は、一旦ブリ・ガンダキの谷底に降りて北へ向うしかない。ここから **Jagat** の間にガレ語を話す部落が2つ程あるという。この村の人口の40%程がガレ族である。村は3部落に分れ、ガレ族の多くは左端の部落に住む。ガレ語地域といってもガレ族はこの村と **Barpak** 村を除くと、他の村ではせいぜい住んでいても数家族にすぎないと云う。大多数はグルン族で、他には少数のカミとスナル（鍛冶屋のカースト）がいるだけである。
19. **Uiya** 村から殆んど垂直の崖に階段状に造られた道を600m～700m程も下るとブリ・ガンダキ沿ひの細い道に出る。（膝はがくがく。）それでも北の **Larkya** に向う本街道なのである。過去において多くの日本人や外国人の登山隊がこの道を通して、**Manaslu** や **Ganesh** に登ったのである。
20. ブリ・ガンダキの **Tatopani**. ネパールには、あちらこちらに **Tatopani** といふ地名があるがこれは「湯」の意味で、温泉の湧出する湯所である。水汲み場と全く同じ様に造つてあるが、日本と異なり、お湯に入る習慣がないからこの蛇口から出て来るお湯で体を洗うだけである。約2週間全く体を洗えなかったので大変助かった。ここからは約3日で **Trisuli Bazar** に着いた。（現地人なら2日、通常のトレッカーは多分4日、登山隊のような大パーティなら5日から6日以上あゝるだろう。）

